2011年（平成23年）
第45号
（9月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

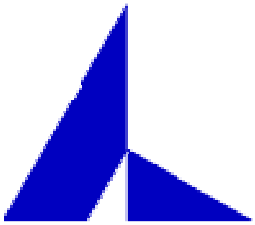
結成６０周年を迎える新宗連　　10月17日記念集会

新宗連青年会は50周年　11月26日に記念式典

新日本宗教団体連合会（新宗連）は今年、結成 60 周年を迎える。10 月 17 日に、東京・渋谷ＣＣレモンホールで記念集会が開催される。また、新日本宗教青年会連盟（新宗連青年会）も結成 50 周年を迎え、11 月 26 日に大阪府富田林市のパーフェクト リバティー教団大本庁錬成会館大ホールで記念式典が実施される。

新宗連は、参加教団の結束をもって世界平和の実現と人類福祉の増進に寄与することを目的に1951年(昭和 26 年) に結成された。「信教の自由」「宗教協力」「世界平和」を目標に、核兵器廃絶、開発、人権、環境などの諸問題と取り組んでいる。現在、本会を含め 70 教団が加盟。全国に 11 の総支部、56 の協議会がある。

1966（昭和 41）年の結成 15 周年に新宗連のシンボルマーク（右図）が制定された。これは「人」を原型にしている。宗教は、「絶対者（神・仏)」と「人間」とによって成り立つが、過去の宗教がとかく絶対者が中心で人間がなおざりにされてきたのに対し、新しい宗教は人間を重視していることを象徴している。



新宗連では毎年、東京・九段の国立・千鳥ケ淵戦没者墓苑で「戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」を実施している。今年は8 月 14 日夕、約 2,500 人が参列し、戦争犠牲者に慰霊の誠を捧げ、絶対非戦と平和への誓いを新たにした。さらに今回は、東日本大震災犠牲者の慰霊と復興、福島原発の放射線汚染の終息を祈念した。

第 46 回 8. 14 式典「平和の祈り」

京都では、新宗連近畿総支部京都府協議会を組織している。同会では加盟教団の相互交流を実施し、親睦を深めている。主な活動として、教団訪問、環境学習会、京都市深草墓園法要などを展開している。

昨年の教団訪問

講演会紹介　「元気の出る教育講演会」

10 月 9 日（日）13 時半から、キャンパウプラザ京都において、京都教育者教育研究所が主催し、大畑誠也氏の講演会が開催される。熊本の高校を蘇らせた実績を持つ同氏の講演は、どの会場でも勇気と感動を与えていた。問い合わせは所長の松井克友まで。TEL 075-921-2814。

講師：大畑誠也氏

お知らせ（１０月の教会行事）

1 日（土）	朔日参り・日曜参拝日	9：00～
4 日（火）	開祖さまご命日	9：00～
10 日（祝）	脇祖さまご命日（家庭教育）	9：00～
13 日（木）	お会式・日蓮聖人遠忌法要	9：00～
15 日（土）	釈迦牟尼仏ご命日	9：00～
	同夜間ご命日（各支部）	19：00～

時事刻々

9月11.日。十年前のこの日、アメリカ同時多発テロ事件に世界中が震撼した。六ヶ月前には東日本大震災の被害の悲惨さに世界中から支援が集まった▼犠牲になられた方々に、改めてお悔やみ申し上げたい。故人になられた方々も霊界において我々を見守っておられることだろう▼日本では古来より、悪運に遭われ、この世に思いを残し亡くなられた方々の霊が成仏するようにと供養する。本会でも、犠牲者の慰霊供養を行っている▼学問の神様で有名な「天満宮」は、政治的不遇を被った菅原道真の怒りを鎮めるために祀られた。悪霊が転じて、守り神になった▼我々の供養が届けば、不幸にして亡くなられた方も、安らかになられ、霊界から家族や親族の幸福を願っておられることだろう▼今ある「いのち」を大切に、日々精進することが、霊界におられる方の願いに応えることだろう。この気持で、秋の彼岸を迎えたいものだ。

全国から２万３９９６枚の真心を４カ国に

＝＝「毛布をおくる運動」総枚数と配付国発表＝＝

2011年の「アフリカへ毛布をおくる運動」で集められた毛布の総枚数と配付国がこのほど、同運動推進委員会から発表された。

同運動は今年、5月1日から2カ月間にわたり実施され、期間中、全国から2万3,996枚の毛布が寄せられた。同運動推進委員会では、協力団体を通して現地の状況を調査し配付国を検討。アフリカ北東部を襲っている大干ばつの被害などを考慮し、今年は、ケニア、エチオピア、ウガンダ、モザンビークの4カ国に決定した。収集された毛布は、神奈川県横浜市の大黒国際貨物センターにある日本通運株式会社の倉庫に保管され、出航に向け準備が進められている。現地に届けられた毛布は、協力団体を通し、難民や国内避難民など生活困窮者に手渡される予定。

なお、毛布と併せて呼びかけられた海外輸送協力金は、8月31日現在、1,980万6,643円に上り、同協力金は9月30日まで受け付けている。

「慈悲の生涯」に学び布教伝道を誓う　脇祖さま報恩会

9月10日、本会創立より、庭野開祖とともに布教伝道に取り組んだ長沼妙佼脇祖を偲ぶ報恩会が、約400名の会員が集まり開催された。映像によって脇祖が歩んだ「慈悲の生涯」を振り返り、脇祖の足跡を偲んだ。参集した会員は、改めて脇祖の慈悲の心を倣い、布教伝道を誓い合った。

元気いっぱいの「シルバーフェスティバル」

9月10日午後、体育館において「シルバーフェスティバル」と題し、敬老会が開催された。７５歳以上の会員が140名集まり、食事しながら参加者による余興など、楽しい一時を過ごした。

最初に少年少女フェスティバル（3面）の演技を少年部員が披露。引き続き、参加者による日舞、皿回し、ハーモニカ演奏、コーラスと合唱、支部代表によるカラオケと、年季の入ったところを見せていた。最後に布施法輪クラブ会長が謝辞で「来年も是非開催したい」と述べた。

親子の絆、地域の絆を語る　佼成議員懇話会にて

8月25日朝、京都教会にて佼成議員懇話会が開催され、13名の地方議員が参加し、意見交換が行われた。

冒頭の植田喜裕幹事長あいさつで「心の架け箸」大作戦を紹介。東日本大震災から時間が立ち、被災地から離れた東京以南では、現地の状況に対する関心が薄れてきている。そこで、東京から京都までの9か所で『震災復興のメッセージが書かれたリサイクル箸』を配布し義援金を募った。この箸を提供した箸メーカーの社長は「父から世の中の役に立つようにと言われたから奉仕している」と述べられたという。

参加した各議員から、被災者への支援の絆、復興に向けた地域の絆や、子供との絆、親との絆の大切さについて語られた。

全国で戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日

66回目の終戦記念日を迎えた8月15日、大聖堂はじめ全国各教会で「戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日」式典が行われた。大聖堂には会員約2千人が参集。第二次世界大戦をはじめとするすべての戦争、紛争の犠牲者を悼み、現在も各地で続く争いの早期終結、恒久平和を祈念した。

京都教会においても多くの会員が参集。中村教会長は説法の中で「硫黄島からの手紙」の映画に触れ、数百万という尊い命の礎に今の日本があることを肝に銘じなければならないと述べ、自分自身の命は先祖からのリレーであり、尊い「いのち」の活かし方は本来、人のために生きたいと願っていると説いた。

●なさざるは受くることなし

（佼成会のことば）

このことばは「縁起の法」を端的に表した言葉です。つまり、善いことを行えば幸せという果報を受け、悪いことを行えば不幸せという果報を受けるという意味です。また、なすべきこと（菩薩行）をしていないと、受けることがない（よい結果が得られない）という意味でも使われます。何もしないで、ただお題目だけを唱えてご利益を授けてもらおうといった態度に対する厳しい戒めでもあります。人を仏道に導き、また勇気や希望を与える行為などが菩薩行ですが、そうした菩薩行の積み重ねが巡り巡って本人の幸せにつながっていくのです。

そうした実践が何よりも大切であると気づかせるために、「なさざるは受くることなし」という言葉を使うのです。

人間には過去があり、現在があって未来があります。ところが、私たち凡夫は「現在」というものを自分の都合で考えたり、受け取ったりしがちですが、その「現在」は「過去」の行為の蓄積によって現れてきます。したがって、自分に原因のないものは何も現れてきません。それは「未来」にもいえることです。今この時を法の如くに生きていけば、「未来」は必ず素晴らしいものとなります。このように「なさざれば受くることなし」という言葉は過去・現在・未来を貫いている「縁起の法」をわかりやすく表したものです。

今月の言葉　～年齢を重ねる～　京都教会長・中村憲一郎

仏教に「四住期」という言葉があります。人生を四つの時期に分けて、20 歳までを勉学に励む学生期（がくしょうき）、40 歳までを家庭をもって家族と過ごす家住期、60 歳までを林の中で自己を見つめて暮らす林住期、それ以降を家を捨て放浪の旅に出る遊行期というのです。現代に合わせると、60 歳までは家住期・林住期混在なのでしょうが、還暦や定年退職を境に今までの地位、財産、名誉といった価値観から離れ、自由な人生を新たに求めることなのでしょう。しかも 60 歳から 80 歳までに自分の意思で自由になる時間は、約 10 万時間もあるのです。急速に進む「少子高齢化」にともなう「大衆長寿の時代」「人生 80 年時代」をどう生きるか。今月の会長先生のご法話は**「年齢を重ねる」**です。

釈尊のお言葉・法句経には「ただ年をとっただけなら『空（むな）しく老いぼれた人』といわれる」や「学ぶことの少ない人は、牛のように老いる。肉は増えるが、彼の智慧は増えない」、さらには「他を思いやる真心と徳を具え、慈しみ深い人こそ長老と呼ばれる」との記述があります。会長先生はさらに安岡正篤先生のお言葉を引用され、**「老い」とは、「いくら年をとっても、まだ至らない、足りないと向上にいそしみ、それまでに培ってきた知恵によって他を思いやること」**の大切さをご指導くださっています。年を重ねても自分を磨く努力を怠らず、身につけた能力や経験を生かして他を思いやり、喜びを差し上げる生き方を勧められているのです。人生は「一生学ぶ」ことなのですね。

とはいえ、私たちは直ちに「老い」を受け入れがたいものです。なぜか？開祖さまのご著書「人生心がけ」には、「老いの寂しさは喪失感」とあります。失うものがたくさんあるから受け入れがたいのですね。つい愚痴になったりイライラしたりする。そのことに関して開祖さまは、**「視点を変えてみることが大事。肩書や地位の喪失は自由の獲得にほかならず、考えるポイントは、失ったものを数えるかわりに、自分が手に入れたものを数え上げること」**そして、**「幸せは、今自分がいるその場所で見つけ出すもの、気づくもの」**、さらには**「老年とはまさに熟年期、人生最高の豊饒の時。愛されるお年寄りになりましょう」**とご指導くださっています。

開祖さまの笑顔の秘訣はこうしたところにもあるのです。失ったものを数え上げ、たあいもない愚痴で自分を貧しくし、みじめにするほど悲しいものはありません。せっかく頂いた「老年のとき、人生豊饒のとき」を、喜びと感謝で生きて参りましょう。そんな生き方をめざして、私たちは日々ご法の習学に励んでいるのです。

会長先生は結びに、「人間としてこの世に生まれた喜びや、生命の尊さ、有り難さなど、人生の核心・要となるものを後世に伝えることは、まさに思いやりの発露であり、老人の役割」とし、「老いてこそ人生」ともいうべき前向きな心構えをお説きになっておられます。私たちの先輩は、開祖さまのように「生涯修行者、生涯求道者」をめざして精進を重ねてこられました。今月は、開祖さまとともに本会を創立され、法華経実践の証を立てられた脇祖長沼妙佼先生の慈悲のご生涯に学び、また、お彼岸や敬老の日のご縁を通して、両親や先達の修行精進に心をいたし、他を思いやる、慈しみ深い人間をめざして精進させて頂きたいと思います。

中高生集合！　夏季学生部活動より

8 月 21 日、中学生、高校生、大学生と、バスケットボール＆バトミントン活動メンバーの男女部が 20 名ほど集まった。地下体育館全面を使い、バトミントン、卓球、バスケットボールをみんなで楽しんだ。

また、スポーツの後は食堂に移動して、今回の目玉企画の「かき氷」。石田支部長が中心となり、一皿一皿丁寧にかき氷を作った。それにブルーハワイ、メロン、イチゴのシロップをかけて楽しんだ。

少年部の子供たちも加わり、みんなと一緒にかき氷を味わった。参加した学生部員にとって、夏休みの楽しい思い出になったことだろう。

近畿ブロック少年少女フェスティバル

8 月 28 日、奈良県・かしはら万葉ホールで近畿ブロック少年少女フェスティバルが開催された。「《とどけよう！！勇気と元気》こころひとつに」をテーマに 11 教会の少年少女が工夫を凝らした演目を披露した。

京都教会は、バトン 14 名、少年部 6 名、幼児部 5 名が舞台に上がった。客席からは、数十人の応援隊が熱演に声援をおくった。バトンは１年かけて練習。少年部は自分たちで考えたダンスを披露。東北の子供たちに届くようにと、元気いっぱい、楽しく演じていた。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《松下幸之助さんの思い出》

経済人といえば、ナショナル(現パナソニック)の松下幸之助氏も思い出に残る人であった。永野さんのスケールの大きさとはまた違って、あれほどの大企業の社長でありながら、松下氏は実にこまやかな気配りをされる人であった。人によっては、あまり周囲に気を遣いすぎるとノイローゼになってしまうという人もいるが、気を使うからこそ、無事に生きていけるのではないか。「信号が青になっても、一応左右を見てから渡りだすといった慎重さと気配りがあってこそ、人間は生きていけるのではないか」と言われたのは、確か松下氏ではなかったかと思う。

第一回世界宗教者平和会議を京都で開いた直後のこと。関西方面で大きな国際会議が開かれると、その費用の一部を松下氏に寄付をお願いするというのが慣行になっている、という話を関西の財界人から伺ったことがある。「松下さんに挨拶しておかれた方がいいでしょう」とすすめられて、伺ったことがあった。

庭野開祖は、寄付をお願いするなどということは毛頭考えていなかったのだか、松下氏の方は、「いつ、寄付の話を切り出すか」と待っておられたのかも知れない。その席で、庭野開祖は自分の夢を語り、信仰について語り、また松下氏から**「物を作る前に人を作る大切さ」**といった話をはじめ、色々なアドバイスを頂いて、とても有意義なひとときを過ごさせてもらったのである。

さて、昼食をご馳走になる段になって別室に席を移すと、松下氏はご自分の秘書を呼ばれて、庭野開祖の目の前で、先ほど話したことを要約して伝えられるのだが、ＷＣＲＰのことや庭野開祖の立場などについて、寸分の誤りもなく話されるのを聞いて驚いた。**記憶力の良さというよりも、話を一分も漏らさずに聞いて下さったことへの感謝と、お年を召されてもなお、新しいものを吸収しようとされる松下氏の姿勢に心を打たれたのだった。**

感服したのは、それだけではない。食事を始める前に松下氏が、「庭野さん、飲み物は何にされますか」と尋ねられるので、遠慮なく「ビールを頂きます」と申し上げると、間髪を入れずに、「ビールですか。私も飲みたかったところです」と庭野開祖に合わせて、おいしそうにビールを飲まれる。しばらくして、庭野開祖の嗜好をよく知っている秘書が、「先生、そろそろ温かい日本酒にされては」と小声で言うのを耳にされると、松下氏はすかさずに、「いいですな、私も酒にしましょう」と、すぐに杯を手にされるのである。

徹底して相手に合わせる松下さんのそのもてなしぶりに、ほとほと感心させられ、「まだまだ足りないな」と庭野開祖は教えられた思いがした。こうした気配りは、例えば医師などにはとりわけ大切であろう。患者が「先生、昨夜は痛みがひどくて眠れませんでした」と訴えるのに、「あっ、そうですか」のひと言だけでは患者は取り付く島もない。

それでは医師と患者の間に信頼関係が生まれるはずがないのである。やはり、**「そう、痛くて眠れなかったの？それはつらかったですね」と相手の言葉にエコーする、このエコーの言葉が何よりも大切なのだ。**医療現場ではすでによく言われていることだが、松下氏はそのエコーができる細やかな経済人であった。

《庭野平和財団の創設》

平和への道は長い道のりである。一歩一歩踏みしめて進まなければならない。その平和への道を歩む人々の力を結集していく仕事は、文字通り心身をすり減らすような忍耐を必要とする。しかも、その努力の成果は、すぐに形になって現れるものではない。だから庭野開祖はいつも、**平和への道は「地道」という道だというのである。**一つの国だけ、一つの宗教だけで世界の平和は築けない。そのために身を捧げる〝志願〟に立つ人を、一人また一人と増やしていかなければならない。そして、何よりもいちばん大事なのは、その活動のための資金である。

世界宗教者平和会議の活動でも、様々な会議や活動が暗礁に乗り上げかかるのは、ほとんどの場合、そのための資金を誰が負担するかという問題が原因だった。その時、思い切って資金の提供を申し出る人、国があると、「私も出そう」という人や国が必ず出てくるものだ。**資金や労力の提供を惜しまずに、しかも自分の利益をまったく考えない無私の奉仕に徹する人がいなくては、平和の事業は成り立たないのである。**世界宗教者平和会議の活動は、そうした奉仕に徹する多くの人たちによって支えられてきたのであった。(つづく)

渉外部からのメッセージ

9月4日の日曜参拝で第8回ＷＣＲＰ世界大会の様子を映像で観ることがありました。第8回は会場が原点である京都に戻ってきた時でした。当時、受け入れ教会として色んなことがあったと回顧していると、「大会を支えてくれたのは多くのボランティアだ」と世界の宗教者から拍手の映像がありました。陰の存在を知って頂けることの嬉しさを感じ、自分たちもこういう宗教者を目指したいと思いました。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK京都教会　FAX 075-762-2266